

滿洲語 *ᡩᠠᡳ* の意義

山 本 守

清朝時代の滿洲文記録中には *ᡩᠠᡳ* (Nian) なる文字が往々記されて居る。これが漢人の意味である事は衆知の事であり、清文彙書卷二にも

ᡩᠠᡳ 漢人・蠻子

と見えて居る。何故に *ᡩᠠᡳ* が漢人を意味するかに關しては、誰しも持つ疑問であるが、未だその解釋の公表せられたのを聞かない。こゝを以て些か卑見を述べて大方の教示を仰ぐ次第である。

滿洲語中には數多くの支那語が取入れられて居る。この *ᡩᠠᡳ* なる語も、恐らくは支那語より轉入したものであらうと思はれる。

一帯滿洲語中に支那語の取入れられる場合に、次の様な諸種の形式がある。

A、支那語の音その儘のもの、例へば

支那語 滿洲語

京 (king) 註① gīng

碑 (pei) dai

公主 (kung c'u) sung ju

貴妃 (ku'i lei) gui lei

B、支那語より出でて、其の音の訛りたるもの、例へば

錢糧 (chien-liyang) chalyan

筆 (pi) 註② ɸ

C、支那語に滿洲語の語尾を附して作りたるもの、例

へば 渡 (tu) doombi

孝順 (hsiao-shun) hiyooslanhi 註③

juige → julehe

D、支那語に滿洲語を結び附けて、その語の如何なるものなるかを示すもの、例へば

瑤(yao) gnyao(gu は玉の意)

の如くである。文字そのものが代はり得るのみならず、音のみ變る事もある様である。例へば

金蓮(chin-liyan) gin liyan ilha

Sargan (妻)のGはHの音に發音せられて、Sargan と發音せられるが如き、これである。

後例は sin-liyan なる支那語に ilha なる滿洲語を結合して、その語の花なる事を説明して居る。

大體以上の四種中に包含せられると思ふ。

扱て問題の ㄩ なる語は如何。私はこの語も矢張り支

那語の音譯と考へる。即ち ㄩ なる音を有する支那語と

Kan なる音の支那語の結合したものであらう。然らば

Kan とは何かと言ふに Kan は即ち「漢」なりと考へる。然

し漢は當時の北方音では、Han であつて Kan では無い。

何故に Kan なる音に對して、Han なる音の「漢」を當てよ

うとするかと云ふに、滿洲語に於ては——蒙古語亦然り

——K. H. G. の三音は往々にして互に轉化せられる事

がある。Möllendorff: A Manchu Grammar の例に従へば

emke → emhe

然らば ㄩ の ㄩ の音は如何、私は ㄩ 即ち「逆」(音 ㄩ) では無いかと考へる。清初滿洲と明の關係は決して順の關係では無くして、寧ろ逆の關係に在りしことは史實の明示する所である。然し漢人の中にも、早くより清に服從した、「順」の漢人も存在した。これ亦史乘に見ゆる所、これ等の順の漢人に對して、明國側の漢人は即ち「逆の漢人」であつた。即ち「逆漢」(ni-han) であつたわけである。然るに清朝が漢地に君臨するに及んでは、逆漢は消滅した事になるし、且又逆漢の如き文字を諱むに到

りし事は、「金」國の名を諱みたる程の、清朝の名君には、當然有り得べき筈である。故に清文彙書に見る如き、「イ漢人」なりと云ふ解が附せらるゝに到り、原義の推定に困難を感ずるに到りしものであらう。註③

註① 滿洲文字で、支那音を寫す場合、有氣音は清音にて、無氣音は濁音を以て寫し、有氣、無氣の別を明にして居る。

註② 滿洲字 *Hi* は *hsi* と發音す、故に *Hiyoošan* と書いて、*Hiyoošan* と發音し、始めて孝順 (*hsiao-shun*) の音に對應す。この *Hi* を *hsi* に、*ki* を *chi* に發音する事は、大いに重視すべき事であるに附すべきでは無う。

註③ 現在原義の推定に難き語少からず。例へば、*Jungkin* 錦 (*gin*) *Jungken* 鏡 (*jung*) の如き、その一半は如何なる漢字に該當するものなるやの判定に苦しむ。

附

「北平奉天故宮所藏の蒙古源流に就いてを讀む」

補正

前號に於て私は蒙古源流に關する卑見を述べて置いたが、尙一つ蒙古源流の異本とせられる喀喇沁本蒙古源流について一言して置き度い。

從來喀喇沁本蒙古源流は、蒙古源流の一異本として、其

滿洲語「イ」の意義

舊藏所の名によつて斯く呼び慣らはされたものである。果してこの書が蒙古源流と呼べるべきものであらうか。

成程本書の前半のみを見る時は、確にこれを蒙古源流の異本となすに躊躇しない。然し一度その後半に到るや、蒙古源流とは全く趣を異にして居り、寧ろ *Pokta* *China's*

Hagan u *Caalik* (成吉思汗傳) と極僅少なる出入を除いて、殆んど同一なるものなるに氣付くであらう。思ふに喀喇

沁本は、その卷頭より成吉思汗の埋葬に到るまでの記事即ち「納摩沽噶噶尼雅租鍋上阿雅」なる書き起しより、「於彼處立八屋八間在阿勒台山陰、哈岱山陽之大謬特克地方建立陵寢。號爲索多博克達大明成吉思汗。其名遂留傳至今云」までの記事を、蒙古源流に取り、——蒙古源流に

比し、文章平明にして、用語も近代味を帯びる點よりしても、本書が蒙古源流の底本とは考へられない。——後半即ち窩淵台汗の即位後の記載は、これを蒙文成吉思汗傳に取つて居る。(蒙文書社刊本第二十四葉裏第五行「牛」の年 *Ugudai* (窩淵台) 可汗四十三歳たり) 以下が即ちそれである。然し蒙古源流の文に直に「成吉思汗傳」の文が續くに非ずして、そ

の間

南無蘇瓦斯迪。希特達睦。至尊菩薩降生。鴻德帝王初創。印度西藏發根基。曆述世代詳細。前卷所載「青吉思汗」茲再續述「謬格德依汗」。諸臣宰桑共輔佐。創立國基永固安。「博克達青吉思汗」賓天之後、其四子圖類監國。嗣因「謬格德依」由「和博」歸國。宰桑「楚材」遜「博克達」遺詔請即汗位（滿鐵本、汪國鈞譯に依る）

と云ふ一文を挿入して繫辭となし、兩者を結び附けて作り上げたものである。

喀喇沁本は蒙古源流と「成吉思汗傳」を結び合せたものと言つたが、然し「成吉思汗傳」の全部を収録したものは無い。その第六十八葉裏以下の二十七葉はこれを省いて居る。

尙一言すべきは、私の據つた喀喇沁本蒙古源流は、滿鐵所藏のものを曬印したものである。滿鐵本は又喀喇沁王府所藏のものに據つた事は明であるが、果して原本もこゝに終るや否やは今不明である。この原本は昨年夏私が喀喇沁滞在中、特に留意する所であつたが遂

に發見する事が出来なかつた。旗公署の役人の言によれば滿鐵の星野氏に贈つたと言ふが、現在王府に現存しない事は事實である。現に北平の蒙藏學院に所藏する一本が、或はこれでないかと疑つて居るが、遽に斷定は出来兼ねる。

喀喇沁本の前半をなす蒙古源流は衆人の知悉する所、又贅言を要しないが、その後半たる「成吉思汗傳」とは如何なるものであらうか。本書第六十二葉裏に於いて

蒙古諸汗の根源綱要を記せる “Altan tobči” と名附くる經典終れり。

とあるを見れば、本書は大體に於て Altan tobči に據つたものと考へられる。然し本書は Altan tobči の終れる後に

成吉思汗より以後、蒙古は、三十五代の汗、位に就けり。

と言ふ書き起しの一文が附加せられて、一書を成すものである。——この後の部分に對して喀喇沁本は “Cinggis haegan i Yabuksan čirik un Yabutal un tūitelai,” (成吉思

汗之行軍紀)なる見出を附して居る——。

以上述べた所を表示するならば次の如くなる。

A] *Allan tobči.*

成吉思汗行軍紀

↳ *Bokda Činggis hagan u Čadik.*

(成吉思汗傳)

B] 蒙古源流(成吉思埋葬迄)

Činggis hagan u Čadik.

↳ 喀喇沁本蒙古源流

(24-68P.)

即ち喀喇沁本は純然たる蒙古源流の異本では無くして、

上述諸文献の合成である。

最後に *alan tobči* に就いて一言すべきであるが、私は不幸にして本書を見るを得ないし、他日の研究に待つ事とするが、本書に關しては

Brutschneider: Medieval researches from eastern

Asiatic sources. (Vol. II. 159 P.)

Lauter: Očerik Mongolskoi literatury. (47 P.)

にその解説が見えて居る。

尙前號一七八頁上段最後の行、北京故宮所藏の刻本と

あるは鈔本の誤につて訂正す。